

メッセージアウトライン 創世記39:1～23「エジプトでのヨセフ」

[1]「一方、ヨセフはエジプトへ連れて行かれた。ファラオの廷臣で侍従長のポティファルという一人のエジプト人が、ヨセフを連れ下ったイシュマエル人の手からヨセフを買い取った」

「ファラオ」エジプトの王のこと。「ポティファル」太陽神（ラー）の与えたものという意味。

「侍従長」宮廷につかえる高級官僚。

[2]「主がヨセフとともにおられたので、彼は成功する者となり、そのエジプト人の主人の家に住んだ」「主がヨセフとともにおられた」このことばは39章だけでも4回も出てくる。(2,3,21,23) これが今後のヨセフの人生のキーワードである。彼がカナンの地で父親のもとにいて甘やかされていた時には、このことばは決して出てこない。彼がエジプトで奴隷として売られ、アブラハム、イサク、ヤコブの神以外、誰にも頼ることのできない環境に入れられた時、細い糸のようであった彼の信仰は徐々に強められ、生きたものとなっていったのである。→詩篇105:17~19 なによりもヨセフが求め望んだから、主がともにいてくださったというのではなく、彼がどのような逆境に置かれていたとしても、そこに主自らが彼とともにいてくださるという事実がすばらしいのである。

エジプトで奴隷とされたヨセフは最初は絶望し、自暴自棄になっていたかもしれない。しかし、彼をそのような心境から信仰をもって主により頼む者へと変え、導いてくださったのは他ならぬ主ご自身であり、主の恵みであったのである。彼は全く一人ぼっちになってしまった時、彼とともにおられる主を深く信じることができたのであろう。主がともにいてくださる人こそ、祝福され、幸運な人となることのできるのである。「彼は成功する者となり、……主人の家に住んだ」屋外の仕事ではなく家の中の仕事を割り当てられたということであろう。

[3-4] ヨセフの主人ポティファルは、彼のすることがすべて成功するのを見た。(3) それは主が彼とともにおられたからである。ポティファルはヨセフの信じる神、主を知らなかったであろうが、彼のやることすべてがうまくいくので、これは普通の奴隷ではないと思ったことであろう。「それでヨセフは主人の好意を得て、彼のそば近くで仕えることとなった。主人は彼にその家を管理させ、自分の全財産を彼に委ねた」(4) 主人の信任は、ついにその家のすべてをヨセフの管理のもとに置くところまで進展する。[5]「主人が彼にその家と全財産を管理させたときから、主はヨセフのゆえに、このエジプト人の家を祝福された。それで、主の祝福が、家や野にある全財産の上にあった」

「野にある全財産」とは農作物や家畜のことであろう。それらが主の祝福により、増し加えられたのである。また彼が家でするすべての仕事もはかどった。

[6]「主人はヨセフの手に全財産を任せ、自分が食べる食物のこと以外は、何も気を使わ

なかった」

主人のポティファルはこのように徹底的に信任するようになった。「しかもヨセフは体格も良く、顔だちも美しかった」アブラハムの妻サラも美人、その息子イサクの妻リベカも美人、その息子ヤコブの妻ラケルも美人であった。それゆえ、その息子のヨセフは眉目秀麗で人も振り返るような美男子であったことは容易に想像がつく。しかし、これが問題を引き起こすのである。

[7]「これらのことの後、主人の妻はヨセフに目をつけて、『一緒に寝ましょう』と言った」

ポティファルの妻は、しばらく前から家で働くようになった奴隷のヨセフに目をつけ、次第に関心を持ち、情欲の目をもって見るようになったのであろう。彼女は主人の妻としての権威を背後にあからさまにこのような要求をヨセフにしたのである。人間の情欲がその配偶者ではなく別のものに向かう時、それはおぞましい姦淫となる。それはあの十戒でも、また現在の法律でも明白に禁じられているし、普通の人間ならば、こんなことは良くないとわかることである。そんな当たり前のことをこのポティファルの妻はいとも簡単に破り、ヨセフに恥ずかしげもなく言い寄って来たのである。

[8-9] しかし、ヨセフは当然のこととしてこれを拒む。彼の拒絶の根拠は、「どうして、そのような大きな悪事をして、神に対して罪を犯すことができるのでしょうか」(9)であった。彼の信仰はしっかりと息づいている。もしも彼がエジプトで奴隷として売られてきた時点で、人生をすねて自暴自棄になっていたならば、このような誘惑に簡単に乗っていたかもしれない。しかし、彼は神を恐れるゆえに、そのようなことは断固としてしなかったのである。このヨセフの態度を私たちも見習うべきではないか。ちょっといやなこと、意に沿わないことがあると、すぐに投げ出してすねて、神がいるならどうしてこんなことが起こるのかと不平を言い、聖書も読まず、祈りもせず、礼拝も平気で休み、他人に対しても冷たく接する。良いことや物事がうまく行く時は神をほめたたえ、厳しい状況になると、不平、不満、不信仰になる。これではまるでご利益宗教を信じている人と変わりはない。神は私たちの信仰をためし、鍛えるためにあえて試練や逆境の中を通されることもある。信仰者はそのような時を、信仰をもって耐え忍ぶことが何よりも大切なのである。→ヘブル12:5~8 ヨセフに神を恐れる者としての立派な証しをさせられた神は、また私たちにも信仰者として強く生きる力を与えてくださることのできるお方なのである。

[10]「彼女は毎日、ヨセフに言い寄ったが、彼は聞き入れず、彼女のそばに寝ることも、一緒にいることもしなかった」

ヨセフの拒絶の態度が変わらなければ、ポティファルの妻の誘惑もまた変わらない。まるで根くらべのようである。ヨセフはこのことを主人に告げようとしな。告げれば家庭が崩壊することがわかっているの、彼女があきらめて主人との正常な生活に戻ることを願ってのことであろう。何という優しい配慮であろうか。そしてヨセフは彼女の

要求に耳を貸さないだけでなく、彼女からいつも距離を保っていた。これは誘惑に対する最善の道である。

[11-12] ポティファルの妻はついに直接行動に訴える。「家の中には、家の者が一人もいなかった」(11) これは偶然ではなく、彼女がその権威によって人払いをしていたのであろう。彼女はヨセフの上着をつかんで言い寄った。しかし、ヨセフはその上着を彼女の手に残し、外に逃れたのである。(12) このような誘惑はそこにとどまって解決の方法を探るのではなく、逃げ出すこと、遠ざかることが一番である。ぐずぐずしていたら捕まえられるであろう。ヨセフは正しいことをした。

[13-16] ポティファルの妻は逃れたヨセフが彼女のしようとしたことを黙っているはずはないと直感し、自己防衛のために偽りを考え出す。家の者たちを呼んで、ヨセフが自分に対して乱暴しようとしたが、彼女が大声をあげたので、上着を残して外に逃げて行ったと言った。(14-15) しかし、家の者たちは彼女が叫び声をあげたのを聞いていないはずである。上着は彼女が引っ張ったからそこに残されたものであったが、彼女はそれを逆にうまく用いている。「ヘブル人」(14)とは外国人から見て、軽蔑的な意味を込めたものとして用いられている。常に相手を悪者にしようとする人間の悪知恵がここにも見られる。「彼女は、ヨセフの主人が帰って来るまで、その上着を自分のそばに置いていた」(16) これは上着を動かぬ証拠とするためである。

[17-18] こうして彼女は主人を欺いた。ポティファルもまさかと思ったかもしれないが、ヨセフの上着を証拠として見せられれば信用するしかなかったであろう。

[19] 「彼の主人は『あなたの奴隷がこのようなことを私にしました』と告げた妻のことばを聞いて、怒りに燃えた」

可愛さ余って憎さ百倍。ポティファルは妻のことばを聞いて非常な怒りに燃えた。

[20] ポティファルはヨセフを捕えて、王の囚人が監禁されている監獄に彼を入れてしまった。多分ヨセフは弁明しようとしたが主人は聞く耳を持たなかったのであろう。姦淫の罪はイスラエルでは死に値する重罪であり、特に夫のある女との姦淫は二人とも死刑であった。→申命記22:22 エジプトではそれと同じではなかったかもしれないが、単に監獄に入れるだけというのは明らかに軽い処分と考えられる。これは彼の家を繁栄させたヨセフに対する思いが多少残っていたということもあるかもしれないが、やはり主なる神の守りの御手がそこにあったから、このような処分になったのだと考えられる。この監獄は「王の囚人」とあるように、一般の人間ではなく、王に仕える立場にある者たちが、何らかの罪を犯した場合に入れられたものらしい。そして、40:3を見ると、この監獄は侍従長であるポティファルの家にあったということがわかる。

[21] 「しかし、主はヨセフとともにおられ、彼に恵みを施し、監獄の長の心にかなうようにされた」

このような事態になっても主はヨセフとともにおられた。これが最も素晴らしいことである。私たちが人に寄り頼み、助けや励ましを得ようとしても、当てが外れたり、冷

たくあしらわれることがあるが、主なる神はそうではない。主はその契約に従って、アブラハム、イサク、ヤコブとともにおられ、彼らを祝福されたように、今、ヨセフとともにおられ、恵みを与えられるのである。主は彼を監獄の長の心にかなうようにしてくださった。

[22]「監獄の長は、その監獄にいるすべての囚人をヨセフの手に委ねた。ヨセフは、そこで行われるすべてのことを管理するようになった」

ポティファルの家で重く用いられたヨセフはこの監獄においても同様に用いられることになった。これはヨセフがそこで楽をできるようになったということの意味しない。彼はそこで人間関係の持ち方や、さまざまな仕事の手順、効率的な管理のやり方、エジプト人のことば、考え方、法律、習慣、政治的なこと、その他多くのことを学んでいったであろう。

[23]「監獄の長は、ヨセフの手に委ねたことには何も干渉しなかった。それは、主が彼とともにおられ、彼が何をしても、主がそれを成功させてくださったからである」

ヨセフも囚人の一人であるのに監獄の長はヨセフに任せたことに関しては何も干渉しなかった。ポティファルの時もそうであったが、これは彼への信任がいかに厚いものであったかを示している。何よりもヨセフのなすすべてのことがうまくいき、成功するのは、主が彼とともにおられ、彼が何をしても成功させてくださったからである。ポティファルの家でも、監獄の中でも主は彼とともにいてくださり祝福してくださった。今、彼は奴隷の身で、しかも監獄の中で自由とは程遠い生活をしなければならないが、このような束縛の中での様々な仕事、経験がやがて豊かに用いられ、イスラエル民族の救いへとつながっていくのである。

私たち主を信じる者の人生も同様である。様々な人生の苦しみや困難の中でもみくちやにされ、弱気になり、不信仰になり、つぶやき、叫ぶ時にも、ちゃんと主はともにいてくださるのである。アブラハム、イサク、ヤコブへの主の約束は信仰によるイスラエルである私たち信仰者にも受け継がれていることを覚えよう。→ガラテヤ3:26-29、ローマ8:32、ヘブル13:5

私たちはどのような時にも主がともにいて導き祝してくださるということを信仰によって信じなければならない。様々な苦しみや悲しみを通らされるのは、それがヨセフと同様、私たちにとって意味があり、私たちが主にもっと近く歩み、成長させられ、豊かに用いられ、実を結ぶようになるためなのである。私たちは不信仰にならないで信仰をもってどんな時にもともにいてくださる主に信頼し、主を愛し、主を恐れ、主に従う者として忍耐しつつ、前進していこう。